源五兵衛おまん　薩摩歌

上之卷

櫻咲く、彌生は鴈の出かはりに、新參の燕置つけて、跡を濁さぬ水の面、這出の蛙一合半、首にかけたる杜鵑、木々の梢も繁藏と、誰が呼子鳥草履取、一季半季の花鳥も、兎角は御緣次第なり。流行小唄も時につれ、時の昔と何處へ往く。寛文年の頃かとよ。御城本は但馬國、京の屋敷は千本通、千本立の植込も、若葉の錦見掛から、長者町をば押廻し、出水通の長屋門。此大屋敷を預り、京、江戸、御國の御用等一人に承る、御留守居平鹿の何某殿にこそ、中途に奴草履取、召置るれど力々より、引を求めて目見えする。此頃五人三人宛、毎日吟味なさるれど、好い男さへ稀なれば、すこしよめなる女房の、びかしやかぶるは科ならず。中間頭寄親の四十平下見をして、「ムヽ何れも好い奉公人衆、さて御家の若旦那、殿樣よりお小性に召出され、親旦那御同道で只今は御江戸

鴈、燕、蛙―皆春行人に譬ふ　跡を濁さぬ―立鳥も跡を濁さぬの諺　這出の云々―ポット出の奉公人は一日二合半を貰ふ故に云ふ　繁藏―中間の名に戯るを掛く　花鳥―出替る雁、出替時は三月五日（近代世事談）　少しよめ云々―穀よき女の自慢顔する事

に。御若年の若旦那、氣を知た上方者を抱えてやらんと仰せられ、小まんさまと申す姉御様、お部屋のお庭へ召出され、簾越しに御覽あり、女中寄ての御極め。女中多いといふ中にも、背のすらりと眉目の好い、二十餘りの女中が受返答を召れふ。林殿とて姉御様の御氣に入り。第一此人の言成しとはいひつ、緣次第仕合次第」といふ處に、小庭へ廻る車戸の、懸鎰外す女の聲、「これ四十平、奉公人揃ふたら、一人づつお庭へ廻しや」と言捨て立歸る。四「それ〳〵彼が林との、簾の内は姉妮様。御前が近い競合ず、下馬前をして振ませい」「ない」と應へて振出す、手先上りの頭八分、腰の捻りに足取に、すつ〳〵、すつ〳〵砂地に膝をする。花かいらぎと散る花と、ざんざめいたる掃庭の、緣の上には腰元衆、簾に挾みしおはな紙、姉御様ぞと奥床し。中にも林は手を突て、簾の中より何事か御意なさるれば「あい〳〵」と、お返事申して尋ねける。林「これ〳〵前な糸鬢の、鬢かりつけた鏢髭奴、今迄は何處に居て、在所は京か田舍か。お小姓方の奉公は、髪月代におお好みある。手覺えあるか」と尋ぬれば、奴「私が生國陸奥の國。七ッ道具の一通り、お馬の湯洗ひ伏せ起し、武家の奉公しからせば、糠味噌汁の花散て、近年高野に相勤め、小姓廻しはいたせしが、高野六十那智八十、きんか頭の若衆にて、遂に月代剃た事、ごはりませ

擬りませい―鏢を振ちつしやい頭八分―頭より少し高く（松屋筆記）
花かいらぎ―蝶
鮫の皮の鞘
絲鬢―頂を多く剃下げたる狹き鬢
冒成とは云ヤ―取成とは云ふもの、
ごはりませ―よくゞ高野六十―紙の歌なるを近松は六十、八十にてまだ小姓を勤むる意に用ふ

升かけを切米—切ると切米とかく、米量る枡かけの穴を切れば長命すと云ふ　町人参—町人　香附子—武士　川芎—抽氣　當歸—當期　半夏—半期　茯苓—腹立　麥門冬—問答　薏苡—我意　木香—春　地黄、大根—精分を増す藥　定齊—大阪の藥種屋、如才にいく　天鵞絨—尾陌はい吹—金を吹分る　京者云々—金は京都が一番良き故　分銅—鉛を混じたる銀　生き悟い—通用せぬ　鉢髪—はげ長くたてかけと云ふ　中剃あり（我衣）

ぬ」と答へける。林「きやうとや怖や。其樣な目出たい若衆に、升かけをきり米望み次第ぞや。次なは何うぞく」奴「拙者は悴の時分より醫者衆に相勤め、町人參や香附子方の奉公は不案内。地體我們は川芎持ち、同じ處に當歸まで、半夏々々と季を重ね、罷在し朋輩の、中居に烏渡甘草の、甘うまい事仕り、旦那茯苓いたされ、詮議區々麥門冬、季中に其處を追出し藥。それより心に我蓯を張り、假しや浮世は陳皮の皮、肩に木香かたげても、地黄に大根しらがまで、斯ては果じとこんのだいなし薑一片。腰に一本藥研鐥、頬に鍋墨髭人參、煎じ詰たる奉公人、暫文白蓯和中散身を粉藥に御奉公、定齋なし」とぞ答へける。林「實に氣の藥なものなれど、女中の前の長口上。近頃天鵞絨の半襟かけた、次の男は町の風、武士の勝手は合點か」奴「さてもお目利今極め、黒印打て私儀は、銀座に長々使はれ、駕籠乘物のはい〳〵ぶき。京者の正眞。お屋敷方は新分銅、聲に鉛は混らねど、少と生き悟いと申す故、歩を引れても奉公の、種替へます」といひければ、林「それでは此方に使はれぬ。末の季までは包みの儘、宿に居やや」と笑はるゝ。林「後な奴が國處。あもと麓の赤松を、打割り松の油烟髭。氣味好い頭のすり鉢髪、江戸すりがらしと見えたよな」奴「御意の通に丁稚奴は、信州木曾の山家者、嚴く冷る寒國の、髭に氷柱の朝嵐。

ごきし—枕
末白雪—謡曲錄平にある句

供先—殿の先に立つ供

布子一つでお供先、ふろか信濃の〳〵、ハッァ冷たいな。實に雪國で身を寒晒し唐辛。天目にごきしゆせん酒、一兩二歩の取替を、春めきながら借越して、末白雪の買かかり。首だけ積る借錢の、深田に馬を欠落いたし、木曾を走つて參りし」と、いへば各々打笑ひ、「左樣な者を抱えては、此方の算川粟津の原」と、哄と興をば催ほしける。林「お庭の隅に目をもつて、碁盤格子の染帶を、骨牌結びや年配も、二十二三四五六七、押せ〳〵振て出ませい。在所故郷は何國にて、小姓廻しの一通り、お江戸の勝手覺えてか。供先き、乘打ち、下馬前に、大名方の目標も、知るや如何に」とありければ、奴「悴九州薩摩者。推參ながら古へは、大小刀もさそふ水。叶はぬ濡れに身を浸し、廣い薩摩を狹められ、近い朝鮮琉球より、遠い東都は日本の地、命菜種に油の涙、摑み奉公いたしても、戀しい奴めに先一度と、江戸に三年都に二年。公家、武家方のお小姓髪、結立は持ませず。六十餘州の大名樣、お馬標、鎧標、お駕籠をさへの紋印、諳に覺へて罷在る。御奉公は緣の者。これを取得に召置れば、常江戸、脇城、國脇まで、申せば事も長い事。先一國名に高き、城主樣方概略」と、口拍子にて連ねけり。

諸國鎧標

「武家繁昌の御威勢、我らが口に掛卷も、勿體波風治りし、お江戸は貴賤群集の中、御どうぼうを連らるゝは、外に數なき類なき、お家の是がしるしなり。重ね盛羽の大烏毛、對のお道具突立て、お駕籠の者は裏菊の、裾に藩籬染たるは、名にし奥州五十四郡の旗頭、旗は白旗黑羅紗の、杉形鞘に羽織着て、お駕籠舁のは是ばかり。同國若松の主ぞと、誰白河の大身の鎧。駕籠の紋は松皮菱、鱗形の腰替り、白頭の振禿、二本松の城主とかや。素鎧の鉤の枝垂糸、さつと枝垂て、枝垂鳥毛の大小は、是れ南部殿、津輕殿。奥大名の長道中、奴が首も投鞘に、紺に手杵をつく、つく〳〵〳〵岩槻の御城主と、名乘て出羽の米澤は、摘鳥毛の唐人笠。六尺は重千斤。白鳥の笠鉾鞘、煤竹羅紗の袋鞘、大厂木打たる印こそ、庄内の主ぞと、白熊の天目鞘、これが秋田の佐竹殿。劍鎧の中締に、六尺模様はぐる〳〵。御紋も車は越後の村上。黑羅紗の軸子鞘、同く桔梗十文字、紺に無紋の六尺は、加賀に梅鉢百二十萬石に、續くものなし似たるものなし。御紋ばかりは越中も、似たりや似たり杜若花。花菖蒲、菖蒲皮の角十文字、白頭の大禿、これ越前家六角の、筒鞘の二本道具は若狹の小濱。劍鎧軽子の鉤鑓素鑓は、伊賀伊勢の津の御城主。花色羅紗の巾着鞘、輪違の六尺は相州小田原。兜巾頭と大身の鑓は、下總の國佐

倉の御城主。栗色の敲鞘、筆形の中締は、江州彦根の御大將。黑熊の如意寶珠、駕籠は輪抜に角の棒、美濃の加納の主なり。青貝柄に切立鞘、信濃の松代。白柄に白鞘兜巾頭、駕籠は東木丹後の宮津。裾膨の對のお道具出雲の松江。駕籠の紋は丸に蔦の葉のきませ、退け〳〵とつと退け〳〵、鳥取鳥毛大鳥毛、因幡伯耆のお國取。搖磨の同國印も似たり、姫路は赤し明石は黑し。何れも素鐺の中締にて、分銅形の一對は備前の岡山。鉤鐺に白獅子の摘毛の棒は備中松山。駕籠の紋は丸に虎の尾、ぴんと跳ねたる備後の福山。獨樂形の白鳥毛、駕籠は紺に斷りの染抜き、袋鞘は安藝の廣島。扨又四國の御大名熊の皮の投鞘は讃州高松。同く伊豫の松山は、黑熊の唐盃に、お道具持が醉ふたとさ、醉ふたとさ。とさ〳〵土佐の高知は中膨。お駕籠は紺に香の圖なり。阿波、淡路の兩國主、撞木鞘と丸十文字。六尺は繋ぎ菱。繋げや〳〵永樂錢の駕籠印。黑鳥の末廣は、周防長門の萩の殿。さて九州に到つては、御紋も石餅、圓丸鳥毛は、筑前福岡の御城主。蠟燭鞘と鐮鐺は筑後の久留米。天目鳥毛は同國柳川。白熊のすみ袋、杉形の中締は、豐前の小倉。中津の主。白分銅は豐後の杵築。萌黃羅紗の袋鞘、白滑皮の裾膨。銀杏の丸の駕籠の紋、肥前佐賀の御居城。大袋は同國唐津。ずん切鞘に銀の笠、手杵は島原平戸

の城主。白猪の丸筒裾腰、同じく筆鞘、駕籠は淺黄に山道こそ、代々肥後の御國主。劍形は日向大名。十文字は對馬の縣、黑能の片鎌は高麗迄も隱れなき、大隅薩摩の御大將。其外諸國の御大名、數も限もあら慮外、申すも長柄の御鎚標、概略斯く」と、述ければ、簾の内外ざは〳〵、「能ふ〳〵云たり申たり。扨も〳〵」と漸暫し、手を拍てぞ褒らるゝ。

林「やれ幸ひの奉公人、此者に極よ」と、四十平を召出され、「おとな殿へ申て取かえ渡し、吉日なれば今日中に請判極め、今宵からお屋敷に泊らせよ。薩摩者とあるからは、さの字を除て津摩藏とお付なさるゝ。彼へ立て休みませい」津「ない〳〵〳〵」と立ければ、四十平小隅に招き「して切米は何程欲い」津「半季に二兩二分下され」四十平興覺し、「それでは一年五兩か」津「いかにも〳〵近年五兩取まする」四「すれば其方は實盛じや。道理で女中の氣に入た」と、連て入日も三重短夜や、秋の初夜過ぎ早夜中、「蒸くり熱ふ寢憎や」と、小萬の君の夜半起き、庭にとほんと風受て、「アヽ生熱や、此方が樣に肥たものは猶熱い。男持て痩たいぞ」と獨言して、「これは〳〵、土戸の鎖が下ずにある。林が麁相で忘れたか。誰ぞ來いやい」と召す處へ、屋敷廻りの拍子木の音。月に近寄る影見れば、新參の津摩藏、小「ヤア是は好い慰み」と、ツィ立寄るも女松の蔭、男氣入らぬお部屋なり。新參は勝手知らず、

ちとせ―一千歳老

切米―扶持米を錢に替へて與ふ

實盛―實盛を蟷と云ふ故（柳亭記）

とほん―茫然と

戸の開くまゝに突と入り、庭の隅々拍子木打ち、爪立て蚊帳の中、好もしさうに見る間に、密と廻つて戸を引立て、鉦さす音に膽潰し、津「申し〳〵未だ私が出まする。鉦開て下されませ」尓「いや〳〵此處に鉦はない。むざと男の來ぬ處へ來たが不祥。明日まで待や」

むざ―うつかり

津「ヤア、それでは私首がない。是れ四十平殿お助け」と、拍子木鳴すを、尓「エイ囂い〳〵。拍子木置て貰はふ」と、取て擲つて、手を把て、「コレ些とも大事ない苦にするな。おれは此處の姉娘小萬といふ者。其方は濡れゆゑ薩摩を出て、賤しい奉公するといふ。大名衆の標揃へ聞たふも何ともない。薩摩の戀の一通り、根から葉から聞ねば氣にかゝつて夜が寢られず。ひよんな咄しを聞さいて、睡たふて眼がうづく。嘘なしに咄さうか。言ねばこれじや」と抓らるゝ。津「あいた〳〵、申ませう。私は鹿兒島で菱川源五兵衛と申て、親兄共は小知を取り、我等末子の是非もなく、來迎院と申す知行寺へ後住の約束、十三の秋から豆腐、蒟蒻、念佛の外、魚類女類は口にもかけず、善導か法念の化身であらふと申した。又寺の旦那に濱の町といふ處、芭蕉布屋のおまんと申すは筑紫一番、和泉式部か小式部の化身と褒た小娘。彼奴が我等を見たびに、齋に參れば抱付き、墓へ參れば抱付き、滅多無性に抱付ども、此方合點參るにこそ。和泉式部の化身めが、此法然の化身

惚れ―男女の情事

參るにこそ―參らぬ

と相撲を望むと覺えた。投てくれふと存じて、或時墓へ參つた處、私は裸體になり、長老樣の緞子の袈裟腰にきつと締付、さア御座れと抱付た。彼方も拔らず四ッ手にくみ、汗水流して組合ふとて、何やら囁き呟いて、互に因果を晒屋の、臼から杵とは此事。まんまと法然上人が、彼方の十念授り、諸譯の五十相傳受け、四十八夜の常念佛、互に忍び忍ばれて、物三年は夜晝なし、千日の回向まで一日懈怠も仕らず。是が知れいであるものか。沙彌が聞けば長老が聞く。兄が知れば親が知り、髮を剃さぬ其内に、縛首打るゝ沙汰。如何も國に堪られず、おまんと後の契約して、十九の年に薩摩を出で、十方世界を駈廻り、お尋ねなれば身の上の、願以此功德氣の毒な、お咄しなり」とぞ語りける。

小「さても〳〵可笑い樣で悲い咄。其人はおまん、をれは小まん。身に擬へて涙が飜るゝ。國竝びの事なれば、若は聞やつた事もあろ。おれは肥後の熊本、笹野三五兵衛樣といふ人と、後紐から緣組あり。無事で御座れば疾に肥後へ嫁入する。八年前に彼のお人、病死なされた便宜あり。一門衆も親達も、盃はせず顏は見ず、方々貰手ある内に、はや片附ふとあつたれども、頑是なしに道を立て、十二で小癪な髮を斷り、今で後家は立れども、若い女子の可愛と思や。妻戀ふ犬猫鳥翼、蟲にも劣て男の肌知らずに死ぬる。今

註釋—色の道

十方世界—佛語、單に諸國の意にいふ

後紐—子供の時

若い女子云々—も萬の後家を制む

の樣な咄を聞く度に罪つくられ、當座にしやんと嫁入て退れば好いものを、阿呆な戯酒仕過いて、湯の辭儀は水になる。吸ても見せず心から、煮こじけの若後家。一字違ふて名も能ふ似た、三五兵衞樣と思ふて、其方をおまんに借たいが、なんと一夜は貸す氣か。おまんに請やつた五十相傳、此小まんに授てたも。手を合せて拜みます。サア南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、これなふ南無阿彌陀じや」と身を揉し、笑止悼はし恥しょ。源五も困り狼狽て、「おまんが五十相傳は丸裸で受ました。夜は蚊が喰ふ明日」と、逃んとすれば引留め、小「氣が注なんだ蚊が喰ふ。蚊帳へおじや」と抱入るょ。いやじや〳〵もお主の威光。蚊帳打上る煽風、有明消て「これ〳〵、これが安養極樂世界」何國も戀の闇ぞかし。お氣に入の林は肴より茶の間に寢たりしが、土戸に錠を忘れしと、手燭挑げてお寢間の次、御用もやと立窺へば、有明消えし襖の彼方、しめやかな男の聲、合點いかぬ、蚊の鳴く聲か、いや〳〵人に紛れないと、緣先見れば男の草履。「サア惡性に極た。男は何者、襖蹶破り飛入て、二つ胴に斬重ねん」と跳出しが、「アヽ左樣でない〳〵。笹野三五兵衞とも言る身が、世間は病死と披露して、葬禮まで取行ひ、あらぬ女の眞似をして、五年七年辛氣を碎くも大事を思ひ立たる故。念願遂げず、本名顯はし、小事に大事を忘れては、今

惡性―不義を言く

三やなち〳〵レナ〳〵と

つやつくろひ—艷白粉

不覺—不覺悟、輕卒

氣負ひ—粗相つかしい　嗜め—慨め

迄が皆倅倜の沙汰。一家一門武門の名折れ。堪忍の場、思案の場、默止れ〳〵人や見る」と、舊の女でしやなら〳〵と立歸る。お寢間は彌々聲高く、今ぞ別れの私語言。エ、妬ましく口惜きに、下部の持たる拍子木あり。三「ム、ウ忍び男は下郎よな。假へ望み遂たりとも、三五兵衛が女房を下郎に偸まれ、目前の女敵見逃しにならふか。日頃塗たる艷白粉の、つやつくろひも入らばこそ」と、裾捻上て足頸も、人に見せずと包みたる、紅衣地袋の色も出る。腓太股最と黑く、女の爲なる緋縮緬、足纏ひぞと高褰げ、男の下紐顯はなる。常に嗜む紅皿も、今宵血潮の膝の皿、鐵漿壺の鐵も、心を鋼錆おとし、引寄せ引寄せ一刀、挿櫛、笄、こん小枕、小微塵になれと髮搔撫、左足を蹈で駈出しが、南無三寶刀は部屋の長持に、取に歸るは手延なり。無刀でかゝるは不覺なり。夜中はんじの時計の聲、心せかするばかりなり。「ハア、彼の廊下を來る人は朋輩のおしゆんじや。此奴は饒舌の轉婆め。見付られては大事ぞ」と、褰げ下して前搔合せ、所體つくれば目の前に、元の林と奈良團扇、空睡りこそゆたかなれ。おしゆんは何の氣も注ず、「林殿、此處に何してぞ」といへば、態と喫驚して、「ア、何んぞいの氣疎げな。お寢間が近ひ嗜めや。明日は月の十五日、鐵漿つけて寢やうか。寢て待つ男もあらばこそ。氣散じな獨寢、此處で寢る

ひよんな―思ひ

ほてくろし―黐くろし

淫奔者云々―夫なき故不義にあちず、只淫奔といはる、筌也

も同然。和女も往て早ふ寢や。明日逢ふぞ」といひければ、しゅん「さればいの、今日ひよんな草紙を見て、氣が騷いで寢られぬ。何時もの樣に夫婦事して寢ませう。今宵は此方さんお内儀にならしやんすか。但男にならしやんすか」林「ア、何方になつても思ひの種。男とも女子とも見立次第」といふて居る、下心こそわりなけれ。しゅん「いや〳〵如何でも女子が好い。實可愛らしい女房じや。ならば男と生れて、貴樣と一夜寢て見たい。何うもならぬ」と懷に、手を差入て抱付ば、林「ァ、ほてくろし放さんせ。女子同士寢やうより、一人寢て本の事、夢に見たのに德がある」と、洒落に紛らし逃入れば、しゅん「妾も夢の相伴」と、追へてこそは三重入にけれ。此人音に源五兵衛、「露顯ては身の落度、お暇申す」と駈出る。小まん押留め、「覺悟あつてするからは、其方に難儀かけはせぬ。ハテ高が後家の身。淫奔者といはるゝまで。思案がある待てたも」といへども、源「否〳〵、お屋敷は如何もあれ。生國薩摩は人改め强く、我等は今にお尋ねもの。此事國へ聞えては、召返されて罪科に遇ひ、一門の恥おまんが歎き。塀を乘越え夜の中に、大津までも」といふ處へ、林は嗜む長刀裾端折て捲上げ、「奴殿動くまい」と、緣端に跳出たるは、狂氣とならでは見えざりけり。林「こゝ些と合點が參るまい。これ小まん、我こそ肥州熊本笹野三五兵衛。我二歳の時、親

三五左衛門は武州の遊所にて、石子久彌といふ者に討れしを、幼少なれば夢にも知らず。四歳で母に後れ、一門の介抱にて十四の年跡目を繼ぎ、お手前と緣を組み、迎へ取るべき用意最中、毎日門に貼紙して、狂歌俳諧種々の樂書を立て、家中指して嘲哢する。如何なる故と聞合すれば、親の敵があるといふ。弓矢八幡知らぬ事は力なし。敵石子を討取り、此恥を清めずば本國へ歸るまいと、譜代の下人に心を合せ、賴みし寺と内談し め、三五兵衛病死と披露し、鯨魚といふ魚をもつて火葬を欺き、十六歳で國を出、髮を延し女となり、十九歳の九月より今茲二十三歳まで、五年の春秋附添ひ見るに、顏も知らぬ夫の爲、下尼の身となり、まだ〳〵側に居るとも知らず 朝夕我に香花採り、粉進回向歎きの樣子。嬉しいやら不便なやら、部屋に入りては泣暮し、名乘て聞せて、嬉しがる顏見たいとは思ふたが、いや〳〵本望達するまでと、胸に包んで數々は、船車にも餘るべし。日頃にも似ず今夜しも、彼の下郎を閨屋へ入れ、見苦しき態ハ何爭ぞ。あれ體の下司奴を、三五兵衛が女敵といふも口惜い。況んや大事の敵を討までは、無念も恥も怺えふと、心誓文立たれども、凡心の慣ひ、目の前の怒り止み難く、斯う破つて出るからは、討とも無ふても討ねばならぬ。一本指せばうぬめも男。サア拔け。對手にして

弓矢八幡—神に誓ひの詞、決して

女敵—間男

くれん。ヱヽうぬ等風情と太刀打は、武運に盡た口惜い」と、齒嚙をなして歎きしは、道理せまつて哀れなり。源五兵衛莞爾笑ひながら、「ヤレ假令王の子息でも、今草履取するからは、下郎と言れて構はぬ事。併し下郎を相手にするが無念ならば、其無念を歇めて遣ろ。コリヤ音にも聞たか。薩摩の鹿兒島菱川源吾兵衛、雀の餌程な米を取り、馬の脊骨も跨たもの。其方も昔は誰にもせい、當分女子で居るからは、お侍女の林殿。女の相手にならぬといひたい者じやが、それも口眞似童しい。但女敵といふ惡名。髮斷た後家女に女敵とは不理屈ながら、是も調べて益ない事。女敵ならば女敵、如何にとしてもお手前が、親の敵に身を碎く、此處が如何も仕掛れぬ。脇差に手もかけまい。女敵討て門出祝ひ、親の敵を討めされ。それとても是非拔けならば拔ふが、身が國の慣ひで、拔くと鞘を敲破り、再び指さず死ぬるが、是が薩摩の正銘。時には二人討死して、親の敵久彌只た一人の仕合。何の役にも立たぬ事。これ御侍女、女子衆、女敵の首斬しやんせ。サア首斬て取らんせ」と、人を人とも思はぬ顏、有繋に薩摩者なりけり。三「いやさ〳〵武士の喧嘩にぐめんは入らぬ。鞘割ば割れ、碎かば碎け。サア拔け」と詰蒐る。小まん隔り押留て、小「さては三五兵衛樣かいな。此方を男といふことは、三年前から見たれども、三五兵

無念を歇―立派な男にしてやらん

童しい―子供らし

正銘―本性

ぐめん―工夫

はまつたは―歎かれた

物が出來―産物が出來たるなり

切ゴ―袁師

衞樣であらふとは、尤も氣のつく筈もなく、妾やはまつたは是非もなや。餘の侍女は半季でも、季を重ぬれば打解て、冬は同じ夜の物、夏は同じ蚊帳の内、女子と女子の主從は、肌を合せて寢る程に、洒落戯業も言慰む。それに五年の馴染といひ、お果なされた母樣の、鐵漿親にならせられ、おれとは姉妹同然に、一寸側を放さぬに、如何なる事か夜に入れば、唯寢姿を隱したがり、終に側に寢た事なく、小風呂に入れば風邪引いたの、物が出來るの何のとて、伽に小風呂へ入る事なく、胸へ障るも嫌がつて、兎角乳を隱したがる。萬づ起居に心を付け、見れば見るほど男じやが、さては此小まんに執心かける奴さうな。悋氣するか試しの爲と、態と今夜彼の人を、閨房へ呼ふだは是れゆゑ。されども佛に誓を立た道筋は歪むまいと、暗がりに附聲して寢させたは外の者。源五兵衞殿を騙した此詫言は幾重にも、身の明かな證據を」と蚊帳を打上げ、手を取て引出す。お蘭といふお擽上げ、髪も解けて所體なく、顔を赤めて、聞「源五兵衞樣許して下さんせ。アヽ恥かし」と袖掩ふ。三五兵衞は詞なく手持無沙汰に赤面する。源五兵衞も胸衝しが、「些とも苦しからぬ事。小まん樣も女子、此方も女子、人間の身に替りなし。譬へば饂飩と切麥、汁は同じ醬油。何方でもお振舞は同然なり」とぞ和ぐる。小まん取付わつと泣き、「これ三

五兵衛樣、泣ずに言ふと思へども、如何も涙がとめられぬ。出來た仕樣じや御座んすまい。私し明暮れ戀慕ひ、泣悲むを見て居ながら、能ふも默止て見て居られたなふ。去年の春の大煩ひも、此方樣ゆゑといふ事は、看病なされたお前が證據。男は松、女子は藤と元から讐があるげな。松の力で藤も這ふ。男賴みに女も立つ。十二の年から十九まで、人の盛を捨置て、けりやう道を守ればこそ、若し氣が反れて淫らしたら、此方樣斬て捨さんすか。さりとては情ない人。女房可愛がつたとて、負になるか 恥辱になるか、武士が廢るか。八年の月日は取返しはなるまい」と、思ひの限り息限り、絶付て泣ければ、二人の男も理に迫り、泣より外の事ぞなき。三五兵衛涙を押へ、「理とも非とも、是ばかりは一言も返答なし。それはよし夫婦の中。源五殿への申譯 腹切ふと申すとも、よも切せはなされまい。すれば要らぬ化粧業、何とも違却千萬」と、いへば源五、「これ〳〵、お詞の中なれども、親の敵狙ふ身は、盜みをしても許しある。何の是式、お心に懸られな。さて彼の石子久彌といふ者は、只今名波道愚と申す雲水の身となり、或時は勢州に住居、又は濃州、信州、折々は京東山、勝軍地藏の隱遁者に因み、詩文など作る由、草履仲間の咄なり」といひければ、三「有難き御物語り、御恩の上のお情」と、悅び合ふこそ

けりやう―假令の字音

是式―是位

勝軍地藏―相手に勝つを祈る佛

道理なれ。夜もしらくと白む頃、家のおとな磯部與茂太夫、寄親の四十平、中間四五人引連れ、路次口敲いて、「これくく林殿、お部屋の方に男の聲が聽こえる。錠明さつしやれ。穿鑿いたす林殿、林殿」とぞ動揺めきける。三「そりや爺父めが來をつた」と、周章騒いで三五兵衛は奴振る、源五兵衛は女子の眞似、「先小まん樣隱しませ」と、蚊帳へ入るやら駈出るやら、更に差別はなかりけり。中にも源五物巧者、「騒ぐまいくく、渡り奉公した御庇、我等次第に遊ばせ。私お家に居ぬばかり何の氣遣ない事」と、いふ内にも戸を敲き、下々喚けば詮方なく、土戸の錠を明るとひとしく、與茂太夫突と入り、「さてこそ新參め、縛れ縛れ」と取廻す。源五兵衛少しも怯まず、「いや縛らるゝ科は持ませぬ。夜前始て拍子木役。奥とも口とも存ぜず、戸の明てあるからはと、而も念入れ廻る處、女子衆が見付て、此處へうせれば曲者。夜明迄留置ておとな殿へ渡すとて、錠を下して動かせず。蚊に喰れて居ましたが、それでも縛らばお縛りなされ」と、左もありつべしう言ければ、三五兵衛合點して、「いかにも彼がいふ通り、わしが麁相で錠を忘れた其間に、お庭に來て居ました。勝手知らぬといひながら、後で知れては奥の者の過り。夜明て此方へ渡さうと、錠下して留ました。何の別儀も無い事」と、何れも武士の一疋共、最もらしうぞ言成しける。

三五兵衛は法々—處と反對ヒ云へり

うせた—來よつたありつべしう—尤もらしう

與茂太夫頑い者、「何も奥のお道具に見えぬ物は御座らぬか。能ふ吟味なされたか」三「イヤ何もお道具揃ふて胡散な事は御座らぬ」と、言へども猶彦擊め、與「をのれは好ぬ奴じや。第一鼻が高ふて合點の往ぬ頬。屹度詮議の仕様はあれど、傍へ障れば喧しい。これ四十平、直に大坂へ連下り、薩摩宿へ渡して、舟に乘るまで見屆歸れ。渡した二歩の取替へ返して失ふ。早ふ〳〵」と睨付る。源「ハテかしましい返します。おれが鼻が高けりや、此方が睨る筈か。一歩は其方の一歩、鼻は俺が鼻。それ返す」と投出す。三五兵衛も我身さへ、世を忍ぶ身は詮方なく、「これ其處な者、其方も人の大事、詞の役にも立たであらう。先の人が待ならば、其恩は忘れまい」と、心を含む言こなし。お蘭は奥より走出、「これ待ちや〳〵。此鼻紙入鼻紙、中にお錢もあるさうな。お庭に落てあつたが其方のであらう。持て往きや」と、仇の契も仇にせず、心の底に結び置く、露の情ぞ哀れなる。源五兵衛もほろりとなり、「是は如何にも私の。お芳志は薩摩でも、一生忘れは致すまい」と、お寢間の方をじろりと見て、一ほんに切麥でさへ此お情、此な事なら箸次でに、饂飩も一膳食ましよもの、お殘り多や」と三重出にけり。

二歩の取替―前に取替へて渡してもきたる金

其方も人の大事―源五も己の親の敵を知らせて呉れたる恩は忘れぬと也

私の―私の物

饂飩―小萬にかけて云ふ

編笠形―當時の若者常に被るものなれば戀の意を含めて云ふ

不敵なく―なくは甚の意、甚だ不敵にて手間取―一時賃を得て屋はるゝ者

頼み―結納

中之巻

川下に布搗く晨來て見れば、寒ずる夜半の、霜と見るもの〳〵。椿々、谷川の椿編笠形に開いたら好かろ。猶好かろ。さつさ薩摩の芭蕉布、晒すも織も上方で、學びも奈良や玉川や、宇治より育ちなりけらし。無慙やな源五兵衛、京も東も足留らず、欝に心の不敵なく、又故郷に立歸り、見付られたらそれまでと、おまんに命捨杵の、浮名晒しの其日過ぎ、奉公人やら手間取やら、出入仕事の事介と名を替え、見つ見らるゝを取得にて、語る夜なきぞせう事なき。晒搗の女子男ども、「ヤア事介今か。銀が出來たやら寛りとやりやる。羨い」といふ處へ、内より下女が走出て、「なふ是れ〳〵。今日は内方のおまん樣へ、御祝言の頼みが來る。それで餅を搗つしやる。臼も杵も要る程に、先ア仕舞ふて歸らしやれ。今日の働き、半日拂ひにせうけれど、愁半手間取ふより、頼みの祝ひに皆進上にさつしやれと、お内儀樣の言渡し」と、言捨入れば、皆〳〵呆れて、「何と事介聞たか。其方が出入の旦那じやが、あんまりな慾面。おまん樣の頼みが來るなら、祝儀は上から給る筈、其日過の半手間を貪つて何程じや。それに今日はおまん樣、本の母御

の十三年忌。茶の子一つ配る事か。おまん樣が最愛い。言ふても一人の娘御、彼の名の立た源五兵衛とやら尋出し、物さへ入れれば成る事。方々首尾を繕ひ、聟に取て世を渡いたが先順といふもの。定て賴みの來る方も、大分取れる見込で奉公分といふであらふ。其跡へ銀持て來る男の子を養ふて、又銀の付く嫁を取り、結局に主の連合も追出し、銀持て來る亭主を入れ、惡ふしたらば内との者も置替え、銀持て來る奉公人、敷銀する手間取を尋ねられふも知れまい。傳兵衛のお方如何思やる」と、哄と笑へば、傳「ヲヽそれ〳〵、お蝶の父の言やる通り、一を打て萬を知れ。琉球屋の新兵衛樣といつては、お國は愚か、筑紫九箇國隱れない分限者に、餅搗く臼杵持ずに、晒臼を兼る程な吝嗇。彼の心で餅搗やるは不思議でないか、事介「いや臼ばかりに限らぬ。萬の物を一色で、二色三色に兼はらるゝ。先づ主の身から新兵衛樣を押除け、父母の二役。帷子時も前垂で上下共に仕舞るゝ。」入相時分に膳立して、夕飯夜食を引張、火搔が直に塵取。砂糖桶に柄を付て柄杓を終に買れず。小狗仕入て鼠捕らせ、盜人の用心と一疋で埒明け冬は時々蒲團代り。欠伸も卒にせまいとて、口開き次でに念佛。精進日には和物一ツ。其和物の擂木の、頭の圓いを長老の代僧で仕舞るゝ。慈悲ある者の眞似はせず、吝嗇者を手本に、杓子を定規に

茶の子―茶うけに食ふ團子
物さへ―物は金をいふ
一色―一品
帷子時―上にあれば帷子下に垂るれば前垂
砂糖桶―小さき故柄杓の代りにする
仕入れ―教育して

芋殼―芋を取りたる後の屑

念佛講云々―念佛宗の講中に當れば豆を煮るが例、庚申祭に當者は夜を明す例（生駒遊笑覽）

二月堂の午王―次の如きお祓札

南無頂上佛面除疾病
二月堂
南無最上佛面願滿足

ぽつとり者―愛嬌ある美人

鯛産りませ―鯛出でなされ

使はるゝ。正月の飾が釣瓶縄になるやら、七月の芋殼が壁下地になるやら、念佛講に當れば、熬豆次でに炙して、來月の庚申も取越たいとの呟き。それに奇特な如來樣が欲いとて、佛師を呼ふでの好み事。右の御手に錫杖、左の御手に縛の縄、腰から下に緋の袴、御頭には烏帽子着せ、蓮華の代りに米俵、御面さうを眞赤いに、御口をくわつと大髭。阿彌陀如來一體で、不動、地藏、聖德太子、惠美須、大黑、閻魔大王しまふて、胴の中を空洞に鑿て、二月堂の午王と、お伊勢樣の御祓入る樣にとの誂へ。佛にさへ油斷させず責使ふ和郎じやもの、衆生を責るは道理じや」と、口々誹りて歸りける。琉球と家名を聞けば唐めきて、君は和國のほつとりもの。おまんは千々の物思ひ。七歳で離れた母樣は、十三年忌が二度はなし、お墓へ烏渡と加賀笠に、小風呂敷には手向草。露も涙も押包み、「なふ竹、太儀ながら是持て、お寺まで供してたも。參つて來たい」と言ひければ、竹「お袋樣に問はしやんしたか。妾や喚かれたら何んとせう。今にお前の氣に入りの事介がおじやりましよ。事介連て御座りませ」萬「いや事介は少とお寺に障す事ある。母樣の今藏に御座る間に、早ふ出たい」といふ處へ、母「アゝこれ〳〵母は今藏から出た。動く事はなるまい」と、笠風呂敷も取て投げ、「參らして好けりや參らする。今日は和女の嫁入

世話かく―世話やく

ぎろつく―きらつく、目の前にみる

いつも事例の事、母の慾張は珍らしくなしと也

精進すなら―精進すなといふ事なちば

の頼みの使ひ來る筈で、此中夫婦が用意して、餅よ杵よと世話かくが、和女の目には見えぬか。産落した母御前も七歳の年まで養育、それから以來十何年といふものは、誰が世話で其樣に背丈伸たと思やる。十月の宿こそ貸はせね、恩較べをして見たい。本の母御前から剩を取る。地獄にやら何處にやら、見えぬ孝行せうよりも、これ鼻の先にぎろつく此母に孝行なら、寺も精進も取措て、今日は莞爾笑ふて、生臭物で祝ふてたも。其代りに來年は祖父樣の三十三年忌。それと一度に荷ふて、和女の母御は十四年忌、一年でも多ければ弔はるゝ佛も徳。此方も雜作は少い」と、差手引手に算用なり。何時も事なり親ながら、おまんも餘り堪へかね、「最う好い加減に默らんせ。他人でさへ、恩ある方親しい中は精進して、寺道場へも參るのが、先づ道さうに御座んする。腹を借た母樣の、十三年忌の墓參りが、それ程科になりますか。第一は此方樣の外聞冥加もあるものと、寺へ上るお布施も、皆此方樣の芳志に書付をしました。嘘なら風呂敷見さしやんせ。死んだ人への回向は此方樣への孝行、此方樣への孝行は佛への奉公。母といふ字は同じ事、妾や別隔はせぬものを。又しては〳〵、左してもない事苦口言ふて、我も嗔恚を燃したり、人にも惡氣附さんす。精進すなら爲ますまい。寺が嫌なら參るまい。子は親次第

のものなれど、縁の道ばかりは押付所爲には成らぬ事。頼み取たか取らしやんせ。妾や嫁入はしませぬ。せめて十ヲに一ッは父様にも問はしやんせ。母に對ふて口過すも、皆此方様が言さしやんす。あんまり氣強ふ御座んす」と、袂を顔に押當て、恨み歎きの其中にも、今日命日の亡母を、慕ふ涙ぞ優りける。母「ヲヽ、泣く程嫁入がしともなくば爲せまい。一期男持ずに居やるか。何れ顔見やう。ヲヽ、嫌さうな顔じや。俺身の好やる男はおれが嫌、親の許すは和女が嫌ひ、押付所爲はしますまい追付け頼みが來る筈。なげかやいて見せうぞ」と、喚き散す折、下袴に媒人が、袷羽織も鹽目好き、大鯛、昆布、柳樽、五色の縮緬、紅眞綿、附紙臺、折紙臺、三荷に擔はせ、「先づ萬事首尾なつて、私まで大慶」と舁込めば、女房今まで夜叉の忽に、愛敬柔和の高笑ひ、一まァ〳〵是は〳〵夥しい。何故に留ては下されぬ。去ながら貴方も代が一度の事。皆お媒人のお世話ゆゑ。これ姉、お禮申しやいの。彼の子も今朝から悦んで、待受て居ましたが、恥しいと見えました。良人の新兵衞奥に待受居られます。先づ彼へお通り。供の衆は端の間へ、男共は何處へ往た。事介はうせぬか。これおまん、目を拭ふて鼻でも軀や玉よ、此進上物持て來い。それ茶の下を、吹はちやつと酒屋へ、淨盤臺に水がなさそふな。吸物に何を醬油か。

鬘目—折目
附紙臺—黄金一枚などと書きたる包紙を臺に綴にて張付けたるもの（貞丈雜記）
折紙—目録書
鬘—下女の名に
かむをかく
吹き—拭きにか
く
淨盤臺—走りに
かく
醬油—寫ように
かく

いやざつと薄味噌を、鰨炙れ」とやかましく、連立ち奥にぞ入にける。おまんは胸もせきかへり、サア頼みを取では最う遁れぬ。わざくれ燒けじや。破て出て、忍男の構があると、とんといふて捨ふか。寧そ内を走らふか。いや〳〵源五兵衛樣も日蔭の身、其上に苦を持せては愛しい人の身の大事。談合もするものを、今日は如何して見えぬぞ。父樣を呼立て變替して貰はふか。内の者は身にならず、心の合た友はなし。何とせうやら彼とせうやら、遣瀬涙に氣も鬱り、座敷の内をうろ〳〵と、起たり居たり泣くばかり。時刻移れば奥の間に、「千秋樂は民を撫で、萬歲樂には命を延ぶ。相生の松風、さつさお暇〳〵」と、好い機嫌にて媒人は足もひよろ〳〵立出る。新兵衛も送つて出、媒「兎角目出たいお目出たい。おまん樣追付好い殿持せます。お内儀樣と申します。兎角目出たいお目出たい」と、管を卷てぞ歸りける。母は酒氣に猶氣强く、「何んとおまん見やつたか。安ふ積つて百兩足。何程四の五のいやつても、我身の細工で、彼れ程の男は些と持憎かろ。皆媒人の肝精。親父殿の名代に、媒人へ禮に往て、氏神へも參つて來ふ。何れぞ暇な女子共、供を雪駄よ綿帽子よ」と、引繕ふてぞ出にける。おまんは母の町内を出離るゝまで見送て、門口より走入り、「父樣これは如何ぞいの」と、膝の上にかつぱと伏し、絶入るば

鰨―踊るにかく
わざくれ―マヽヨ燒くを
千秋樂云々―謡曲高砂にある句
肝精―盡力
雪駄―雪よにかく

逆らはず一下にそなたをの四字を入れて見よ

かりに歎きしが、「育てし恩があればとて、縁の道は格別ぞや。殊更今日は大事の年忌、弔ふ者は妾ばかり。眞に無縁の佛の日、出家の一人も供養せず、お墓の花も枯次第、持佛の香も消え次第。ざゝんざ所じや御座んすまい。但今の母様の、仕様が好いと思ふてか。嫁入は思ひも寄らぬ事。重ねていふても下さんすな。寧そ死ねなら死にます」と、聲を上て泣ければ、新兵衛も涙にくれ、「我子の心底恥しい。今の母に目がくれて、死んだ母を忘れたと、思ふ恨みが恨めしや。今日は往なさん追出さんと、幾度筆は執たれども、堪忍せしも子の可愛さ。七歳から馴染たる渠めさへ彼の辛さ、跡に呼ぶは猶以て、馴染は薄く氣兼して、互に隔もある時は、苦勞に苦勞を重ぬべし。世話の譬にいふ如く、眞の母の折檻より、隣の人の扱ひが、痛いといふは誠ぞや。如何なる賢女貞女でも、乳房の母には似もつかぬ。斯ういふ我も其通り、若い時分は色もある、頭に雪を頂いて、寢覺强なる夜なくは、稚馴染の子の親を、忘るゝ事はなきぞとよ。此度の縁付も一旦心に隨ふて、三日なりとも居て戻れ。其上では如何様とも、望みの通り違へはせじ。さらくは彼めが贔屓でなし、兎角心に逆らはず、可愛がらせう爲ばかり。今日の佛が不便やな。預て往んだ此娘、何とて粗末に思はん」と、縋付て泣きければ、萬「それなら是非に及びませ

ぬ。必ず〳〵苦に持て、煩ふてばし下さんすな」と、親子手を取り縋合ひ、泣叫ぶこそ道理なれ。父「こりや〳〵戻つて見をれば喧ましい。縫物でもして居や。酒の上に泣いたれば、アヽいかふふらつく。やあゐい」と手枕すれば、萬「少ととろ〳〵となされませ。妾も其間に、事介の頼みやつた洗濯物、つい仕立てやりましよ」と、取出す我も其人も、互に思ひ替らじと、神に誓を掛針や、此血を染し指貫なりと、思へば心みだけ絲、過し其夜を忘れかね、思ひ切かね捨かねて、心の底に包み綿、落る涙の糸筋に戀を絆込む哀れさよ。事介は頼みの使ありと聞くより堪り兼ね、嗜む一腰ほつこんで、覺悟極めし顔色、門に駈入り、「おまん樣これ來ました」とばかりにて、おろ〳〵涙で立居たり。おまん嬉しく「ハァおじやつたか、先づ上りや。母樣は留守、父樣は寢轉んだばかりで、碌に寢入はなされぬぞ。物を言やらば密といや。お眼が覺れば惡いぞ」と、眼まぜ頷き知らせける。事介嬶て合點し、「今日は御縁付の極めがあると承り、お出入申す私が、お前の嫁入をおめ〳〵と、知らぬと申すは一分立ぬ。御心底を聞屆け、其目出度いお座敷の、お茶の給仕を、これ急爾所をまづ此樣に、お給仕でも致さんと、脇指さして參つたが、はや御祝儀は相濟み、御縁付は極まつたか。早ふ聞たい〳〵」と、胸撫擦るばかりなり。萬「いかに

ばし—助辭、は に同じ

やあゐい—ヤツコラシヨ

神に誓を云々—以下雜物の事に色々の名をかけたり

指貫—指切にみだけ絲—亂れたるに

縋込—包むに

急爾所—給仕と急所とかく

行丈—意氣込
袖下—人不知
袖形—縫の道
はづしの絲—初心
縫當—縫捨し
小褄—裾
辨形—縫目

も出入の門の事、其方に知せ、取持て貰はずば、殘多く腹も立ち、無念も嘸と思遣り、種々心碎きても、先づ一旦は緣付に遁れ難なふ極りし。嫁入する日は死扮裝、葬禮の儀式と聞く。此方の用意は死用意。嫁入の供をしてたもらば、其方も定て死扮裝。此誂への縫物も、其心得に仕立れども、心の底の行丈は、昔も今も替らぬが　彼の袖下の言換し、いよ〳〵一尺一寸も、引かぬ合點か聞たい」と、縫物に言托せて、問へば答へも返し縫ひ、心通はす端縫の、詞の緣こそ哀れなれ。萬「我もそもじも缺腋の、其袖形の行肩も、何も彼も未だはづしの絲の、愛しとまでに思わくの、釘の本末覺え初め、互ひに心懸糸の、緣に綜糸括袖、釘目人目も思はねば、親の躾も假や只、解な解じと仕立しに、縫ひ易き習ひとて、誰がみょづに聞傳へ、さがない浮世の袖口に、かけて裂れて形きなや。文の音信言傳も、誰れ縫當ず中絕て、何時染々と久振り、行丈逢た夜半もなし。果敢なきものは女の身。親の詞に内襟の、餘所の小褄に綴られて、辛や悲しや忍び泣き　涙小釘にしく〳〵と、まばら〳〵に縫こぼす。實に道理や、とても肩身ばかりが浮々と、存命果る身巾なし。縫込廣き身でもなし。かたの惡さに裾切れて、人を恨みん道もなし。思ふた事、言ふた事、今は仇なる逆袵、三寸落しに裁切て、此世の契麻糸なれど、來世

は長き糸卷を、繰返しては繰返し、縷れつ縋れつ合せ糸、六道の縫目に待針して、手は遲くとも待ぬべし」源「ア、跡も結ばぬ糸筋の、一筋先へ拔んとや。一人殘りてまだ〳〵と、誰を相手に裾合せ」萬「針道違ひ着憎しと、手づょの浮名は取るまいとよ。さては賴もし愁に、まだ着替なき此生は、五尺に足らぬ襟落し、狹き浮世は何かせん。戀にさはりのせき縫の、積る思ひをかたあけて、同じ刀に裁違へ、一ッ枕に伏縫して、三途の川の脊筋にて、結留ましよ縫留ましよ」留てとまらぬ涙の糸、裾を引合ひ褄を引き、二人が歎き諸共に、疊み込めつょ泣沈む、世に便りなき戀路なり。時しも戸外に念佛も、鉦の響きも哀れげに、細々と女の聲、「これは上方より諸國を巡る修行の尼。草鞋の價賴みます」と、聲付賤しからざりけり。新兵衞起上り、「ヤア事介來たか。あれ一錢取らせ」といひければ、萬「なふ父樣、母樣のお位牌に念佛一言手向の爲、彼の修行者を持佛堂へ呼入ても大事ない事か」父「ヲ、氣が付た奇特々々。殊に比丘尼の事といひ、雷奴が戻つても大事ない事。これ事介呼入れよ」事「唯」といふより戸外に出、見れば京の屋敷にて、假の契のお蘭なり。互にはつと驚く顏、事介ちやつと我身を蔭に、頭を掉て口の内、「何も言ふまひ言ふまひぞ。ゑへん〳〵」と知らすれば、心得首肯く目元にも、浮ぶ涙ぞ至極なる。事「こ

跡も結ばぬ—末のをさまりもつけずに
針道違ひ—契約違にかく
手づゝ—拙き
せき縫—障り
かたあけ—うちあけ
伏縫—伏すにいひかく

雷—八釜敷妻の事

苦は色替る—苦は何處へでも附纏はる

石上樹下—佛の難行苦行

非時—佛家にて午後の食事

れ内方から志がしたいとある。此方へ〳〵と案内す。聞「ハア御免なりませ」と、笠を脱で腰懸る。おまん茶を汲み饗應て、「若いお人の上方から、筑紫の果まで修行して、發心の因縁は如何した事か知らねども、今其身には苦もなふて羨しふ御座んす。眞に此世の佛じや」といひければ、聞「あのおしやんす事はいの。苦は色替ゆる松風、通り風の吹く樣に身にも染まぬ一時戀、物言ふ間もない仇し男と、假初臥の轉寢、後も前もない戀なれど、お前樣も姫御前、女の果敢い心から、二人に枕替すまいと、思初たが善智識。髪容つくつてさへ高の知れた妾が嫖緻、衣を墨に天窓を圓め、戀慕はれふと思はねば、寧そ氣樂で、何れ佛では御座んする。されば佛の石上樹下とて、石の上、樹の下陰の宿も厭ひ給はねば、岩が根枕氣散じながら、寢覺々々に如何やらすれば、彼の仇臥の因果めが、煩惱を起させます」と、餘所に語りて事介を、尻目に睨むぞ氣味惡さ。事介も迷惑さ、「エヽ此處な佛殿、問はず語りせぬものじや。近頃佛とも覺えぬ人じや」といやがれども、新兵衛氣も付ず、「菩提の縁は種々、殊勝にこそ存ずれ。今日は我們が先妻の忌日。彼の中二階の持佛に薫譽蓮清と申す位牌、あれにて念佛御回向賴みます」聞「それなら彼れへ通りましよ」父「いざ〳〵あれへお通り」と、二階へ上れば新兵衛、「事介賴む、何ぞ一種で非時をせ

い。さらばお布施を包まふ」と、奥の間にこそ入りにけれ。二階を暾上て事介、「エヽ打見には殊勝らしく、咄を聞けば淫奔者。信心が覺たれど、非時をせよとの吩咐。豆腐でも取て來ふ」と、起たんとすればおまん取付き、「コレ待つしやれ。彼の尼は、内々咄に言しやんした、小まん樣の侍女お蘭であらふが、何故默止て隱さんす。但妾があのお蘭を取て嚙ふと言ましたか。如何いふ心で御座んす」と、問詰られて顔を赤め、事「ムヽ今の尼の咄が蘭が噂に似たゆゑに、其處を以ての惡推か。イヤ是はいかひおはまり。彼のお蘭があの尼ほど見えれば、薩摩へ戻らず京に居る。床から出た顔見せたかつた。頭は赤熊、猫背中、鳩胸に顔は猿、ま些とで鶴になる。思出すもなふ嫌や。暗がりの商ひはせうもので御座らぬ」と、紛らかし出れば、萬「いや〳〵〳〵言しやんすな。それなら何故門口で、咳拂して首肯合ひ、何もいふまい〳〵とは何んの事で御座んした。命をかけ身を捨て、親に見返る男なれば、鼻息にも氣を付ける。低ふ言ふたら聞まいと思はしやんすが不覺の至り。過にし事を輪廻深く言ふ氣はさら〳〵無いものを、問はれても未だ隱さしやんす。左程に隔て心を置き、未來までとは能ふ言れた。お蘭が來たも皆あいけん。積られた、騙された。逢染し時の誓文を、金輪際と思ひ詰め、男を大事にかけるゆゑ、今の母に逆

惡推―わるく推量す

あいけん―合拳、グルになる

ひて、常々疎み憎まるゝ。袈裟まで憎い世の譬、今日は年忌の佛まで、憎まするは我戀ゆゑ、多くの罪を爲りしも、皆徒らに成果た。死だ跡では彼のお蘭と、心安ふ添しやんせ。妾や死にます」と、事介が脇指拔て我胸に、突通さんとする處を、源「これは短氣」と飛蒐り、柄に取付き、「これ〳〵今日の日天御照覽、少しも隔つる所存なし。思ひがけなき處へ來て、我も當惑したる上、氣にかけさせて無益と思ひ、先づそでないといふた分。隱し遂げる心でなし。前後の聞分なふ、氣が短い」と挙取れば、萬「チ、氣が短かふて鈍な事、見ながら生ては居られぬ」と、又取著いつ挙取つ、競合ふ中に母親は、戸外まで歸りしが、内の騷ぎに心を注け、暖簾の蔭より覗くとも、更に白刃を奪合ふて、やう〳〵男挙手奪り、手許に置じと力に任せ、投る拔刀が一はづみ、二階の比丘尼が小腕に、鋩はづれにずつぱと立つ。狙ふてはよも當るまじ。障子にさつと生血引て、朱に染れば囲人の、口說も傍へ興覺て、「これは〳〵」と騷ぎしが、されども淺猶甲斐〳〵しく、二階の梯子蹈轟かし、圖「これ源五兵衛殿、おまんどの、有繋は田舍夷よなふ。男に執心引されて、尋ね來たとの惡推か。執心殘る程ならば、可惜姿を慘たらしう、木の端と窶さいでも、人は情の心の花、花の匂ひに引れては、深山谷の奥までも、離れ難なふ慕ひ來る。戀路とても

そでないと―― 聞てないと

木の端―法師を大の端の如き不用物に譬ふ（枕草紙）

其如く、此胸一ッするゑたらば、源五兵衛殿で御座らうが、業平殿で御座らふが、戀の絆に繫ぎ留め、物の見事に添ふて見しよ。されども國のおまんゆゑ、斯うなつたとの物語。我身の事は思斷り、和女に早ふ逢せたく、路銀まで取しつらひ、其上にも其中は、何とか成しと氣懸りにて、迚も捨たる此身の果、修行がてらに餘所ながら、戀には味方の欲いもの、役には立たずと力にもやと、八重の汐路を越渡る、都女の戀の仕樣、見習ふて手本にしや。それに刄物を投討して、欺し討に殺そうや。コレ和女の手では得死ぬまい。サア源五兵衛殿、尋常にお手に罹れば身の本望」と、脇指拔て手に持せ、泣喚いて武者振付く。おまん引退け、「これ姦しい、しち諍い。都の、上方の、聞ともない置てたも。西國の、筑紫のとて、情の道に替りはない。和女の樣に言ふならば、西國はまだしも、唐には戀はあるまいか。これ斯う竝んだ妹背の中、和女の樣な女房が、千人萬人妨なし、杆を入れても離れはせぬ。何が邪魔で殺さうぞ。怪我にあたるは其身の不運。言はれぬ處のお見舞がら、都衆の戀には手傳ひが入さうな。薩摩の戀に味方は要らぬ。早ふ出て往ね。腰が起たずば綱つけて、引ずり出すが失せまいか」聞「いや張合になつたれば、斯う居た處を動きはせぬ」萬「ヲ、動かずとも動かせう」と競合ひ捻合ひ立騷ぐ。新兵

萬人妨なし―萬人ゐても差支なしといはれぬ處―要らざる處

合木―裏樽

わんざん―和讒、冗談口

衞駈出、「四邊隣家もあるぞかし。兩方默れ沈まれ」と、制すれども聞入れず。母親始終を聞濟し、水汲合木押取延べ、競合ふ中を容赦もなく、「沈れ〳〵片端に、撲すへてくれるぞ」と、敲き廻りし猛勢は、只山姥の山廻り、舞損ふたる如くなり。銅鑼の樣なる聲荒らけ、「ヱ、親父殿が生緩い。縛し上て置もせず、彼奴等が口說の拐屋の亭主になる氣か。やい事介、おのれはお尋ねの源五兵衞、大事の娘を敎唆し、塞りの此國へ、前髮落して態を變え、又彼の子に惡氣を付け、人の目を暗ますは、人買よりも野太い奴。徒さへお國は人改め、なのれゆゑに此内は、月に一度の判をする。見知らぬとて是非もない、手前に平常飼置て、外から上へ聞えては、同罪といふ一筆の身拔がならふと思ふか。御吟味所へ引渡し、牢へ入るゝは安けれど、おまんが心底量つて、腹を借さぬ母ゆゑに、世間内證、義理一ッで沙汰なしに往なするぞ。尼めも共に出て失ふ」と、常わんざんとは事替り、道理至極に返答なく、おまん涙に性體なく、源五は手を突き頭を下げ、「元に落度ある上に、重ね〴〵の過り、如何樣になるとても御恨みとは存ぜず。只御夫婦、娘御の御難儀のなきやうに兎も角も御計ひ」と、差俯伏て居たりけり。情ある新兵衞も、私ならねば詮方なく、「疾にも斯と打明て仰せられば、何とぞ思案も致さうもの。近頃殘念氣

の毒」と、いへばおまん縋付き、「とてもお慈悲の上からは、妾も源五樣、一所にやつて下さんせ。拜みまする」と泣叫ぶ。母は彌々腹を立て、「おのれが一所に出て往んで、賴みを取た聟殿へ此方とは死んで見せうか。それ親父殿、奥へ連て往つしやれ、事が延れば尾鰭がつく。男共は居らぬか。此奴が宿は棒の津にあるげな。家主へ渡して來い」下男「心得ました」と引立る。おまんはわつと聲を上げ、「なふ源五樣、お蘭と連立ち御座んすの。アア羨しい。腹の立つ」と、恨み歎けば源五兵衛、「往き度ふては往きませぬ。今此庭でさつぱりと、死にたいわいの」とばかりにて、撞と伏て泣沈む。手荒き薩男の無意氣もの、「死にたくば我宿で、撲殺してくれふぞ。コリヤこれを見よ」と、振上て振廻したる棒の津や、棒づくめにて　三重送りける。何時の間に、日の暮るゝとも夜の更るとも　おまんは分も性體も、泣續けなる孀鳥、親の柵むず背戸門に、人目の網の繁ければ、魂ばかり飛鳥の、翼折れたる如くにて、屋敷の内を此處彼處、逃出る隙間もがなと尋ね廻れど、常々に用心精しき屋造の、風の通もなかりけり。「見付られたらそれまで」と、布織る下機取組て、庭木の松に靠せ架け、我身ながらも恐ろしき、智慧の梯子を上るにも、盜みする氣の斯くやらん、顫ひくもやうくと、枝に取付き、塀の上へは上りしが、廻りは用水

緒の津―薩摩川邊郡にあり

隅男―獵夫にかく

用心精しき―用心周到

底知れず。幅一丈の堀切にて、下るゝに足手のかゝりなく、飛ぶことかたき石垣なり。此上は思案もなし、思切て飛で退ふ。水に溺れて死んだらまゝ。千に一つも神佛の、力もあらばと思ひきり、ひらりと飛べば南無三寶、帶を松に引かけて、宙に下つて是も彼の、畏に罹りし野邊の雉子、夫ゆゑにこそ苦しみけれ。斯る處に如何はしけん、お蘭比丘尼は紛れ來て、締たる門口見世格子、覗き歩き、裏へ廻つて此姿、一目見るよりはつと驚き、怖氣立ち念佛申して居たりけり。おまんそれと見るよりも、「ヤアをのれは又來たか。思ふ夫に添ふからは言分はあるまいが、我に恨みが遺つて殺さん爲に來たよな。口惜や。これを見よ。内は忍出たれども、兎角男に緣ないしるし、其方が手にかけいでも、暫しの知死期を松が枝の折るまでの命ぞや。定めて源五樣も同道と覺えた。槍はあるまい、竹の先に小刀でも結付て、夫の手にかけさせて殺してくれよ。エヽ苦しや。身がしまつて息斷れして、アヽ苦しや」と悶えしは、日も當られぬ風情なり。尼「なふ勿體なや。我等に左樣な惡心なし。素より源五樣に露心遺さぬ上、今日御二人の深い中、そもやそも此尼が、半時も男の側に居ては女の道立たず。三衣の罰も恐しく、此世では源五樣に、逢ふまい見まいと鉦を打ち、明日の夜明に上方へ、幸ひ出船の伴もある。夜の中に港ま

知死期—生年月を干支にて綴りて死を豫知する

三衣—大衣、七條、五條、僧尼の服

でと思立しが、待て少時、おまんさまは如何してぞ。力にも成らふと申た一言、嘘にはせまじと來た證據、死なせはせまひ。聲高に暇取て見付られては一大事。何としてがな下さん」と、駈廻つて、「これ〳〵澤山晒布が干てある。此端を屹と結付け、此方らは此木で留て置く。是を手繰れば樂々じや」と、石を錘に結付け、投ても如何屆くべき。力の程も白布の、松にかゝるぞ仕合せなる。おまん嬉しさ「恥しや。疑ひは御免あれ」と、伏拜み〳〵、布引絞り松の木に、慥と括り付ければ、此方は尼が締付て、しつくりの木に留てけり。おまんは片手に布を取り、片手を廻し松の木に、かゝりし帶を引放し、左右に手繰る布引の、瀧津心の胸跳り、目眩氣も消え絶え〳〵の、雲の通路天津風、尼がせくまひ〳〵の、聲を力にやう〳〵と、對ふの岸に手繰着く。聞「サアしてやつた。あぶなや」と抱下せば夢心地、萬「アヽ正眞の生如來、これが誠の善の綱。お禮は何と申さう」と、泣拜むこそ道理なれ。聞「禮をいふ間に夜が明る。所の人に教へるは、釋迦に經か知らねども、陸を往けば遠ふて迫手の氣遣ひ。九里の渡が近いげな。一足なりとも早いが好し。此尼は今生で逢ふ事は是まで。一所不住の出家の身、互ひに便も是限り。早ふ〳〵」と別れ行く。萬「仇を御恩の情人、名殘は盡ず上方で、芭蕉の布を見る時は、形見と思ふて下さんせ」

してやつた—甘くいつた

九里の渡—大隅の福山より稚の津に渡る航路

生平―近江の産にて赤橋の筋にて作る、着るにかく
繼留―おもまひにかく

源五兵衛云々―當時の流行唄にても萬が男なる基うて樟沖に下る時の思を含めたり
高い山から―諸國盆踊唱歌甲斐三にある歌
姿は四季の云々―源五は花の如き美男にて數多の女に思はるゝ故萬の憂が叶はぬ遠懷
蝶川―親を眺めばなるとふより饅たり大隅始長郡にあり

顱「チヽ此方樣松葉の相生まで。妾や一人寢の芭蕉布。御恩生平の目も詰る。涙に袖は半晒。今ぞ一期の織留」と、互の心太布の、名殘は一反裁切て、二丈六尺五尺の身、戀に晒すぞ三重哀れなる。

下之卷

源五兵衛おまん夢分船

唄 源五兵衛何處へ往やる。薩摩の山へ。後はおまんが、涙の海よ。船も押れず、櫓櫂も立たず、寄邊尋ねてうかく、うかく焦るよ、源五兵焦るよ。高い山から谷底見れば、布を晒すは、夏こそよけれ。おまん心は冱寒の冬か。雪の俤ちらく、ちらく忘れぬ、源五兵俤、姿は四季の花なれや、時折りくに流行行く、山ぞ伊達者の山葛、引手數々かずくならぬ、心の種の小舟に、情の上荷はねられて、思ひは沈む。ヤツサ、やつさくの空櫓の音も、耳に悲しく遠ざかる、彼の故郷へ此儘で、又歸らじと思ふにも、これが此世を出船ぞと、親を恨みの目は涙、何に生れん蝶川、松の叢立夏樹立、櫻島人打群て、サンサ沖に、網引釣垂るよ波の雄波を、かきわけくに走る兎の名所ぞや。よよ

妻を都鳥―謠曲の歌なとりたり妻に夫の事

ひらきゝ―地名、一樣に聞くをかけたり足四本―共疑の事

流され人―平康頼を指す

雨の杜―日向の名所（國花萬葉記）

の高野に逃れ來て、遊ぶ野雁や鷺鷗。筑紫の妻を都鳥、ありやと問へどいかにとも、牧の野馬の馬の耳、風福山の渡守、我が思ひはしらずけに、舟も潮も引く方に、下り行く濱ははや日のきし。高千穗の嶽高けれど、高い聲せぬ二人が中の契は此世後世山、隱すほど猶世に漏て、誰ひらきょの、神の氏子の神謠や。「俺們は知らぬが子供等が咄す。おまん寢處に足や四本となんしよばへ。寢處におまん、おまん寢處に足や四本となんしよばへ」謠ふ一節舵の音、蜑の友呼ぶ聲までも、此方が浮名の噂かと、餘所の僻言焚付の、硫黃が島は一饅。流され人の彼の島で、流す卒塔婆も立波に、寄來る〳〵綜くる糸は、くまの三筋が流れちりつる、ちんりちりつる三味線の、渡初にし國とかや。琉球國に打續き、薩摩や、三が國に、霧雨が降らばよな。それぞ立名の憂き雲の、雨のもりとて濡て行く、袖は嵐の吹乾して、顏は涙の水鏡。ア、あれ、あれ〳〵、眉の引墨紅臙落て、髮はばら〳〵海藻和布に、縺れ亂れて何時櫛の齒の「櫛になりたや。ヤレサテ薩摩の櫛に、諸國娘の、ヤレサテ手に渡ろ」「どうがねの、よんぢり嫁御は好い嫁御。此なんなんこの好い嫁。あれ見さいな霧島山の横雲。此なん〳〵此横雲。横雲の下こそ俺們が親里。此なん〳〵此親里。妻里が夜の間に近くなれかし。此なん〳〵此なれかし」繼しき

流灌頂―無縁の水死者を供養すも、之より萬の渺の話

結ぶは有漏路―心一つを惱ます間は煩惱を脱せず

方も近くなれ。潮滿來れば水馴棹、長き日影もほの曇り、心盡しや氣盡しに、暮ぬ先より我心、夕暮の闕眺めやり、睡る鷗に誘はれて、轉睡のふら〳〵と、船に搖れて睡るらん。舟人も睡り漕れ行く、そも一睡の假枕、皆一心の欝結、夢を結びて有磯海、夢か現か幻か、更に分ちも七流れ、流灌頂血の上の、亡者浮ぶる法の水、哀れにも亦不思議なり。導師のお僧鉦打鳴し、釋迦は去り、彌勒は未だ世に出ず。彌陀の彼岸を頼まずば、何時か火宅を出船、乘遲れては誰か渡さん。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀南無阿彌陀南無阿彌陀、南無阿彌陀佛南無阿彌陀。如何なる人の何故に、刃の上の往生か。産のあら血か世の中は、餘所の事とも思はれず。語り給へと尋ぬれば、誰がいふとも浪の音。弔ふ人は琉球屋、おまんと申す姿の花。夫源五の手にかゝり、消て散たる血刀の、法の誓も淺ましや。其おまんとは我身の上。娑婆か冥途か如何にとも、覺束涙せきかぬる、浮世の恨み葛の葉の、返す刀に腹搔破り、男は晨女は宵、一夜ばかりは隔つれど、末の逢瀬は一筋に、流れ寄邊の水施餓鬼、語るも我身聞くも我、心一つをいろ〳〵に、結ぶは有漏路、解れば無漏。萬事は夢の戯れの、手にも取られぬ沖津風、濱風潮風颯々、さつとして覺行く夢の痕見れば、ありしは浪の音蹇々として、海上空しく渺々た

り。おまんは驚く楫枕、我身は元の我身にて、覺ても覺めぬ夢心地。淺瀨の波に下り浸り、歎きの聲に舟人が、舵取直す面楫の、回想せば夢なりけり。「心許なや我夫に、怪我過ちの知せの夢」と、かつぱと轉ぶ兩袖に、涙も潮も滿にけり。夢違へしつ轉じ反へ、心も浪も立騷ぎ、痞は上る山風、吹や追風のそよ〳〵と、風のいろはに帆を上て、走り行へ衞は薩摩潟、沖の雄波に憧れて、便り渚に立つ雌波、身を碎くこそ三重不便なれ。尋巡るやはうぐ〳〵の津、鹽の辻なる裏貸屋、豫て聞置く目標あり。萬「嬉しや此處ぞ」と走込み「ヤアヽこれは源五樣、死なずに健康で御座んすか。先のが眞か是が夢か。何れが夢やら誠やら。息が切れた水一ツ、先づ飲せて下さんせ」とどうと伏てぞ泣居たる。源五抱上水含ませ、「能ふこそ〳〵。心底屆いた滿足した。此上からは親里の、首尾は兎もあれ角もあれ。首は首、胴は胴、甲が舍利になるとても、親の手へは渡すまい。落着て氣を沈めや」と、背中を擦り撫下す。おまんも少し笑ひ顏、「此方樣の顏見たりや、胸も大方沈まつた。氣遣して下さんすな。さて〳〵憂い目辛い目や、身の一代に覺えぬ事。裏の高塀飛損ひ、堀へ落て死ぬる場を、お蘭比丘尼は命の親結ぶの神。眞實奇特な介抱ゆゑ、鰐の口を遁れ出、やう〳〵と福山の船に乘り、九里の渡も千里の如く、とけしないやら怖いやら、

夢違しつ―夢を判じかふる事

雄波―大波　雌波―小波

甲が舍利―甲蟲の如き堅き物が骨になるともと也（雌波土產）

とけしない―待遣し

久しうて一久し振にて

氣が草臥てとろ〳〵と、船枻に手枕して、寢るとも思はぬ其間に、まざ〳〵しい夢を見ました。妾や此方樣に斬らるゝ。此方樣は又腹切て、夫婦又の死人の爲と、流れ灌頂七流れ、殊勝らしい坊樣が、鉦をはつてお念佛。妾や悲ふて〳〵、何やら泣て口說たが、言ふた事は覺えねども、我手に我身の回向して、念佛申すが耳に入り、ふつと目が覺めて恍惚と、今のは夢であつたけな。サア徒事ではあるまい。此方樣の怪我過ちか。但し浮世を見限つて、例の短氣が起たか。早ふ逢たや聞たやと、胸も心もわくせきして、帆掛船さへ間緩ふて、手繰つく程氣が急た。此樣に無事な顏見まいかと思ふたに、妾やがつくりとなりました。善いにつけ惡いにつけ、夢は三日が大事のもの。必ず人に逆らはず、身を愼んで下さんせ。これ此袖見さんせ。夢に泣た涙で、今に濡てあるはいの。思へば思へば夢の間の悲しさが、眞の事なら如何せうぞ。夢が合ふたら如何せう」と、夫の膝に凭伏し、聲を上てぞ歎きける。源五は男氣打笑ひ、「チヽ氣がくたびれては、いろ〳〵の仔細もない夢見るもの。身に金が入るとて斬らるゝが上夢。おれも去年怖い夢、天狗の鼻に取付て、女護の島へ渡ると見た。其明る日、餘所から松茸と赤貝を貰ふた」と、語ればおまんも吹出して、「エヽ好い加減な事ばかり。アヽ久しうて笑ふた。家では親の氣を兼

て、誰に甘へる者がない。妾や此方樣に甘へる。あまやかして下さんせ」と、頬杖枕身を横に互に足を打葬せ、來し方語るぞ盡しなき。斯る處へ母親は、下女下男引連れ、案内もなく突と入り、「ハア、おまん此處にか。左樣あらふと思ふた。來るなら來ると、二人の親に何故知らさぬ。人も連れず、着の儘で、親の外分構はぬ氣か。言ふ事いふて仕舞ふたら、きり〳〵戻りや迎ひに來た」と、前後もなく言捨けり。おまん挨拶言はんとするを、源五兵衛押止め、突と出で、「われ〳〵昨日までは、其方へ出入奉公下人分の事介。今日より元の菱川源五兵衛。一錢持ねど武士の著々。十萬貫目持やつても琉球屋の新兵衛。詞も違ひ座も違ふ。推參至極な案内もなく踏込で、歸れといふは誰が事。此おまんは身が女房。武士の妻女は夫の心次第にて、親の儘にはならぬ事。をのれが宿にて新兵衛を廻いた格とは違ふたぞ。其方ばかり早や歸れ。長居をせば引摺出す」と、烟草引寄せ烟吹き、取て着くべき方ぞなき。女房さすが物仕にて、詞を柔げ、「御尤々々。連て往んだら戻すまいと惡ふお心廻つたそうな。親が千萬嫌ふても、主が心に好たもの、戻さぬとても彼の子が戻らずに居やるまじ。親も何しに留ませう。さりながら、琉球屋ともいはるゝ我々、娘一人を朕かね、長持一箇送らぬと、外聞惡い沙汰も嫌。第一彼の子が身

著々―平治物語なる義平源氏の幅幅の句より出づ、立派なる武士の意

取つて着く―取りつく島なし

物仕―物になれたる分別者

祝ひ、屹度仕立て送りませう。新兵衛心も其通り。其證據に今日は、祝ふて餅を鴻ます。烏渡戻して下さりませ。善哉餅祝ふて戻しませう。サアおまん、起ておじや。サアおじやいの。ア、志太い子や」と言ひければ、おまんは中にうろ〳〵と、「情なや疎ましや。あのょものょが喧しい。烏渡戻つてさらりつと、埒明て來ませうか」「何處へ〳〵。母めが言分皆僞り、騙して瞞して連歸り、賴みを取た聟の方へ送らんといふ心底、面相に顯れた。門より外へ一寸も出しはせぬぞ。動くな。母めも今日が明日になり、千日なりとも居たくば居よ。おまんに於ては戻さぬ」と、既に顏色變りけり。母は元來尋常者ならず、「ア、町人の淺ましさ。お武士の作法は知らず。是非に及ばぬ何とせう。駈落人のお尋ねもの、それでも武士が立つならば、いはれぬ肝精やかふより、町所家主を賴んで連て歸りませう。手間も暇も入らぬ事、皆來い」と起たんとす。おまん取付き、「先ア待て下さんせ。町所へ斷つて、源五樣を今の間に牢へ入れふといふ事か。連立て歸りましよ。先づ靜まつて下さんせ。これ源五樣、萬事人に逆らはず身の愼みと申した事、必ず忘れさんすな。大事のお身じやが合點か。何も妾が胸にある。烏渡戻つて親達を、宥めて歸ればさらりと濟む。私次第にして居なさんせ。つい戻りましよ」といひけれども、源五兵

あのいものゝ
何のかの

しやきだるいー　しやは馬髪、手ぬるき

衞合點せず。「イヤ明日戻さば戻しもせん。今日一日は、此源五が戻さぬといふ一言、首になつても言通す」と、さら〳〵戻す氣色はなし。母は名に負ふ我武者もの、「ヤアヽしやまだるい男ども、おまんを引立て連て來い」「畏つた」と下男、床の上へ駈上る。源五兵衞駈塞り、「武士の女房に指でもさよば片端に、泥膸斬て斬すへん。寄て見よ」と睨めまはす。薩摩一國名取の男、源五兵衞に睨付ら、左右なく寄付ものもなし。母事ともせず打笑ひ、「臆病な奴等かな。昔が今に至るまで、白眼れて死んだ者はない。おまんおじや、手を引ふ」と、立寄る處を拔打に、頰先かけてずつぱと斬る。斬られながらに刀の刄にしがみ付ば、手の中くられ朱になつて逃廻る。おまんは母を斬らせじと、立掩ひ立隔り、拔刀の下へと廻りける。男はおまんを除ん〳〵としけれども、端に急たる手も伸で、見込の曲合外れけん、おまんが左の肩先より、前は乳房を袈裟がけに、兩へさつと斬下られ、既に最後と見えにける。母は怯まず大聲上げ、「やれ人殺し、切た〳〵」と呼はる聲に、當町隣町騒き騒ぎ、我も〳〵と駈集り、手負を勞り、「源五兵衞取逃すな」とぞ掛きける。源五騒ぐ色もなく、大肌脱ではつたと白眼、「やかましい町人共、逃すなとは誰が事。術によつて此源五が、立退かば退きもせん。逃るといふ字が聞憎い。刀を拔くは人斬る覺

曲合―釣合

風體千石―身裝が千石も取る樣なる息をはかり―息を限り

比翼の盃―夫婦の盃

悟。人を斬れば死ぬるは覺悟。嘘か實かこれ見よ」と、左の肩に刀を突立て、「ゑいやつ」と引廻し、返す刀を喉笛に、立ては立てて宛りしが、腹を深く切たれば、腕先弱り仰向に反り、半死半生哀れなり。斯る處に風體千石ばかりなる武士夫婦、供廻り華美に、親新兵衛に案内させ、息をはかりに駈付け、「未だ死切らぬは嬉しや」と、夫婦の手負を看病し、耳に口寄せ大音上げ、「エヽ言甲斐ない源五殿。先年京都で參會した、林と申した侍女、今は笹野三五兵衛。是は我妻、其時の小まん見忘れたか。不慮の緣によつて親の敵の在處、別名まで聞たるゆゑ、翌年敵を討おほせ、數年の本望遺恨を晴し、此小まんと夫婦となり、本國本地に歸參して、會稽の恥辱を雪ぎ、武門の美名を輝すも源五殿の御情。御恩は海山報じても猶報じがたし。先づ御自分の行衛を尋ね、拙者が主人を賴み入り、お國を廣ふ彼のおまんと、比翼の盃取結ばせんと、心の限り尋ねても、今日まで行方知らず。その内にあのおまん、外に緣に付させては、恩を報ずる甲斐もなし。先づ外の手を止むるため、我等が方へ呼取て、靜に貴殿を尋ねんと、我々夫婦が思案にて、媒介賴み作り名して、言入れの結納送つたは此三五兵衛であつたぞや。殘り多や殘念や。さりながら曲がない。よし此方こそ知らずとも、笹野三五兵衛こそは親の敵を討おほせ、本

見付られ—見極められ

薄陀—支那三國時代の魏の名醫

受取たりや云々—保證したりとなり、千年を受けて松風と名付けたり

懷を達せしとは九州に隱れなきものを、何故尋ねては下されぬ。但し今零落て、誤ふまいとの身の卑下か。但し又拙者が、昔の恩を忘れて見ぬ顏しさうな三五兵衞と見付られたか、恥しい。さりとは聞えぬ。恨めしい。せめて好い折對面して、詞を替して滿足した。後に聞て三五兵衞に追腹切れといふ事か。さりとては曲もない。其筈じやない源五殿」と、抱付て泣ければ、今際のおまんも眼を開き、じろりと見たる眼は涙。源五兵衞も手を合せ、「忝い」とばかりにて、各々わつと泣く涙、落て流れて紅なるの、朱の血潮も混ひけり。源「ア、三五殿、御夫婦の御禮は來世で〳〵。とてもの情に御介錯早ふ〳〵」と苦む聲、三「エ、腑甲斐ない、氣遣ひすな。最も深手といひながら、本國長崎に黃陳といふ南蠻外科。昔の華陀が仙力を傳へ、斷れたる筋、折れたる骨、落たる首も繼ぐ名人。此療治にかけたらば夫婦が命も惜なく、千年までは千石取が、受取たりや松の風。風に當つるな身を揉むな。とり〳〵さま〳〵取繕ひ乘物に乘せ、三味線に乘て謠ふは源五兵衞、何處へ往やるぞ薩摩の山の、山は寶の山とかや。